Tochigiから始まる、日本が世界の中心になる

Quantum Ecology Technology Development Project

量子生態学 技術開発事業

説明書　VOL.2
オリジナル技術と開発テーマ

2026年4月

Sience QE SRB

株式会社ソウルリバースバンキング
〒323-1105 栃木県栃木市藤岡町甲1687-1
tel：0282-61-1161

はじめに

温暖化、異常ウィルス、経済格差、地域紛争など、世界中で様々な問題が発生しています。もしかしたら地球は破滅するのではないかと、漠然と不安を感じる方もおられるかと思います。地球規模で次々に問題が起こる原因は、人類社会があらゆる側面で宇宙自然界のメカニズムを無下にして、逆らい続けていることにあります。
そんな時代に弊社は、私たちが遵守しなければならない自然摂理という宇宙法律のような存在を説明する、量子生態学という学問を提唱しました。

量子生態学は、現在の物理科学による現象論から大きく外れた、異端学問です。既存物理科学の研究者は関与せず研究室も使わず、日々の生活や農業現場というごく普通の日常フィールドの中で、理論は誕生しました。提唱者は、義務教育以外に物理科学を学んだことは無く、何も知らない素人が世の中に存在しない科学理論を提唱した背景には奇跡的な偶然が幾つも重なった特殊な人生がありました。これらの偶然は、真の現象メカニズムに気付くよう量子生態学提唱に繋がるようにと自然界が周到に準備した、そんな思いを持つほどです。さらに理論提唱の中で弊社は、とても重要なことに気付きました。それが、今の人類社会が、量子生態学が説明する宇宙自然界の法律のようなルールの存在を、まだ誰も認識していないことでした。それ故に、現代社会は、宇宙自然界のメカニズムを無下にしているのです。従って弊社の役割は、宇宙自然界のルールを皆様にお伝えし、地球環境や世の中が一日も早く自然摂理に沿うようサポートすること、そう考えています。

この義務感の下に10年以上、理論を日本の科学界や産業界の皆様に知っていただき、自然摂理に沿う研究や技術開発を共に実現してほしいと、多数の大学や団体等へ声をかけ続けてきました。でも残念ながらほぼ日本中で、拒絶を受け続けています。一方で人類社会は、地球に対し過酷な負担を強い続けており、自然界は我慢の限界を迎えつつあります。今から弊社の理論全貌を、一から各界にご説明し、納得を得て技術開発へ進んでも、既に間に合わない事態に陥っています。早急に自然摂理に沿う方向とはどんなことか、弊社単独でも研究や技術開発に取り組み社会に提示しないと、取り返しが付かなくなると危惧し、本事業の立ち上げに至った次第です。

このような経緯で2026年3月22日、最初の研究開発事業説明書を公開しました。公開数日後にある会合に出席、ここで奇しくも、量子生態学による技術確立に協業可能な、原子力工学関連企業、特殊無機元素のプロフェッショナル、プロモーションマネジメントプロフェッショナルの3社とご縁をいただきました。皆様に量子生態学相互応用による協業をご提案したところご興味をいただき、現在、量子生態学・技術開発日本グループとして体制構築を進めつつあります。実際に体制実現ができるか否かはこれからですが、弊社としては一歩踏み出せたと感じています。
今後、さらに協業可能な皆様との連携を増やし、弊社所在地の栃木県栃木市から、自然摂理に沿う近代科学に無い新しい概念の技術確立を、多分野で早急に果たしたいと考えています。確立した技術は協業者はもちろん、日本中で活かしながら世界へ届けることも目的としています。この動きが、世の中の方向転換に繋がり、今からでも地球が宇宙の自然摂理に沿うことで、最悪の事態を回避することに尽力したい所存です。

2026年3月発行の「量子生態学・技術開発事業 説明書」と共に本書（Vol.2）をご一読いただき、量子生態学による技術開発事業の実現にご支援頂きますよう、心よりお願い申し上げます。

目　次

量子生態学と、弊社の技術ノウハウ－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－4
１・国内の大学や研究者が理解できない理論技術－－－－－－－－－－－－４
２・量子生態学・宇宙２元波理論と新・原子モデル－－－－－－－－－－－５
３・特殊セリサイトの扱いと鉱物代謝理論－－－－－－－－－－－－－－－６
４・ブラウン運動観察による自然界代謝正常化ノウハウ－－－－－－－－－７
５・自然界ナノ粒子挙動判別技術－－－－－－－－－－－－－－－－－－－８

量子生態学、新たな技術開発事業テーマ－－－－－－－－－－－－－－－－－９
１　新・原子モデルレベル・ 量子作用関連技術開発 －－－－－－－－－－10
２　自然環境レベル 量子作用応用汚染解消技術開発 －－－－－－－－－－11
３　生命レベル 量子エネルギー応用病気予防及び治療技術開発 －－－12
４　植物相レベル 量子作用応用機能性農作物及び食品関連技術開発 －13

量子生態学のミッション －－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－14

量子生態学と、弊社の技術ノウハウ

1・国内の大学や研究者が理解できない理論技術

量子生態学は、弊社代表夫婦、取締役社長の野上昭治（あきはる）と、オーナー取締役の野上倫加（ミチカ）が提唱した学問です。
二人は、物理科学関連の大学や研究機関に在籍したことも、学会に属したこともありません。野上らに量子生態学を教えたのは、自分の健康、食生活、農作業など、自然界のフィールドそのものです。

野上らは1989年に結婚、当時、医者から一生治らないと言われた持病を持っていました。薬嫌いの二人は生活改善を模索、良いと言われた健康食品や健康ツールを片端から試し、これは凄いと納得する製品や技術だけを採用することを繰り返していました。1995年頃には持病は完治し、健康体になっていました。この体験の中で良質な農産物による食生活の重要性に気づき、1999年に栃木県藤岡町で自給自足を目指し新規就農します。農業でも工夫を重ね、数年後には独自技術が誕生しました。

野上倫加の専門は、公園緑地計画です。京都議定書（COP3）を筆頭に環境問題の把握は一般より早く、農業は環境汚染を排除することを意識していました。自分の病気治癒の経験も踏まえ、健康も作物品質も共に向上する技術を模索していました。
間もなく自然界ナノ粒子の持つ分子運動を、顕微鏡で観察するようになります。土や堆肥、鉱物の粉、サプリメント、野菜や果物、最後には人体血液へと観察対象が発展し、地球自然界のあらゆるナノ粒子の分子運動を観察し続けました。この観察は、自分の技術が関与する場合と関与しない場合で、ナノ粒子にどのように差が出るかを確認する状況になっていました。間もなく観察を通し、独自技術が様々な環境に対して同じように作用し、いずれの品質をも向上させることがわかりはじめます。さらに原始地球時代初期、特定分子が自然界を循環するシステムが形成され、以後、今に至る46億年もの間、地球上で生命機構を支配してきたこともわかりました。このシステム下で分子たちは全て同じ分子運動メカニズムを持ち、二人の技術がオールマイティで地球の循環機構を正常化する、そんなことが判明しました。

2010年、この技術に第三者によるエビデンスを得ようと、栃木県産学官連携窓口へ出向き相談しました。そして戻ってきた回答に、愕然とします。
「あなた方の技術を理解できる、大学や研究者が何処にもいません」
途方に暮れた翌年、福島第一原子力発電所の災害事故が起きました。

二人は当時既に、被曝が瞬間解消可能であることを、理論的に知っていました。しかも低線量の被爆解消は、実に容易でした。ところが国民に対し、被爆解消の指導は一切流れて来ません。疑問に思い原子力技術を調べたところ、野上らの現象論と同じ概念が、近代物理科学のどこにも存在しないことがわかりました。それ故に、二人の技術を理解できる大学や研究者が、どこにもいなかったのです。
それまでの生活に放射能は無縁でしたが、この事故は偶然にも二人に、大量の放射性物質を提供することになりました。思う存分、放射性物質の扱いを試して判明したのが、自分たちの技術が、量子レベルで作用するメカニズムを持つことでした。

2011年、未曾有の大災害が発生したこの年、二人の理論位置を示すよう「量子生態学」と名付け、学問を提唱しました。

２・量子生態学・宇宙２元波理論と新・原子モデル

野上らは、地球自然界は電子移動だけで説明できると考えていました。電子は原子レベルの要素ですから、メカニズムを説明するには当然、元素原子の詳細な把握が必要です。原子特性を電子移動に即して分類しようとたところ、既存の元素周期表では用を果たしませんでした。しかたなく、量子生態学専用に使う元素周期表を、独自に作成することにしました。しかしこれも、簡単に進みませんでした。各元素の持つ電子軌道を軌道特性ごとに表現しようとしたのですが、ここでも既存物理科学による電子配置と軌道記述では、詳細を表現できないことが判明しました。最終的に、電子配位の表現に独自ルールを設け、ようやく電子移動を一目で把握できる、量子生態学用元素周期表が完成しました。

この周期表の内容は、既存物理科学の定義や概念を無視した、現在の物理科学の専門家にすればとんでもない暴挙的表でした。しかしこのような表現でなければ上手く現象を把握できず、また野上らに電子移動現象を教えてくれたのは、自然界です。人間が把握する物理科学理論を保持し、自然界の教えを捨て去ることなど到底できませんでした。既存の物理科学に対抗する様相で、量子生態学用元素周期表をネット上に公開して現在に至りますが、この時点で大きな問題が未解決で残っていました。

既存物理科学と量子生態学の間では、中性子の捉え方がまるで違っていたのです。今の科学見解による中性子は、原子核を作るために陽子を繋ぎ止める糊のような役割とされています。ところが、野上らが体験から得た中性子は、電子や電子軌道を通して、自然界そのものを支配していたのです。どこでどうしたらこれほどの見解差が出るのか、長い間、真相が掴めずにいました。

2026年の今年に入り、既存物理科学の量子概念を宇宙形成の視点から、複数の生成ＡＩそれぞれに整理してもらいました。ここ数年で生成ＡＩは恐ろしく進化し、物理科学の専門家でなくても、このような作業が可能になっていたのです。いずれのＡＩも現在の量子論のもとに同じ概念を提示してきたので、これをベースにどこがどう違うかを量子生態学と比較して見えてきたのが、宇宙２元波の存在でした。
そもそも既存物理科学と量子生態学の間には、量子作用や原子構造に根本的な見解差がありました。野上らは、原子の実体は波で、素粒子は存在しないと考えていました。それ故に中性子は、磁性というエネルギーで電子軌道を支配していると説明しています。一方現行物理科学には素粒子の概念があり、ここにアップクォークやダウンクォークを確認しています。これを量子生態学はどう説明するのか、試行錯誤が続いていました。ところがあるとき、明快な説明が閃きました。それが、宇宙2元波理論です。宇宙の構成要因を＋と－の２元波としてシュミレーションした結果、質量の考え方を筆頭に、今の物理科学による成果や理論を壊すこと無く、上手く説明できる可能性を見いだしました。しかも２元波理論によれば、野上らが持つ中性子の概念は、パーフェクトに説明できるのです。

こうして量子生態学・宇宙２元波理論が生まれ、ここから新・原子モデルが登場しました。そして野上らは、量子生態学の応用は、正しい自然摂理の下に地球自然界を正常化できることを確信しました。こうして今年３月、量子生態学・技術開発事業説明書（初巻・カラー版）を作成し、このVol.2の説明書へと繋がった次第です。

３・特殊セリサイトの扱いと鉱物代謝理論

もう一つ、野上らが、自分の理論を確信した要因に、特殊な鉱物資源の扱いがありました。それが、0.2μmで天然埋蔵される、自然由来のナノ粒子鉱物です。

世界で一般流通する無機素材に、セリサイトという粘土鉱物があります。化粧品を主として、溶接棒材料や潤滑剤など工業用にも活用されています。通常、採掘時のセリサイトは岩石状で、用途に併せμmレベルに粉体加工して使用されます。ところがこのセリサイトは、天然で0.2μmという微粉体で埋蔵されていました。

このセリサイトを、1980年代に東京工業大学（旧名）の無機材料学科が研究、世界中のセリサイトを収集して比較を進めました。その結果、野上らのセリサイトは、二酸化ケイ素の結晶中央に亜鉛が一体化して組み込まれた品質で、世界唯一無二と判明しました。しかもセリサイトに混合して、0.2μmレベルの粉体亜鉛も埋蔵されていました。亜鉛は、一般的に閃亜鉛鉱という岩石塊で採掘され、精錬を経て亜鉛が取り出されます。ところが粒径0.2μmレベルの粉体亜鉛が天然埋蔵する前代未聞の鉱物資源を野上らは手にし、この鉱物資源埋蔵鉱山を管理していたのです。

長い間この特殊セリサイトの用途開発研究を進めていましたが、東工大では何故こんな組成になったか解明できませんでした。ところが2012年、量子生態学用元素周期表を整備しながら判明したのが、ケイ素が亜鉛へ原子転換する途中の組成らしいことでした。

この鉱山は、中熱水鉱床由来でした。鉱山でマグマ噴出に熱水が関与して分子運動が発生、ナノ粒子レベルの原子転換途中、冷却して転換が停止した可能性が浮上しました。ここから量子生態学による、鉱物代謝という独自理論が誕生しました。

間もなく、量子生態学の現象理論や中性子概念そして鉱物代謝を応用すると、このセリサイトに放射性排水や放射性元素を作用させて、粉体亜鉛を工場生産できる可能性が見えてきました。つまり、鉱物資源を工場生産する技術が確立できたら、福島第一原子力発電所の災害事故でお荷物になっている放射性排水や放射性廃棄物は、新しい鉱物資源生産の、重要な原材料になるのです。そこで、日本政府や東京電力、日本中の大学や原子力関係者にこの研究を呼びかけましたが、残念ながら否定・拒絶・無視で終始、既存科学界は、量子生態学に興味も理解も示しませんでした。

しかしこうした日本科学界の対応が、宇宙２元波理論を登場させ、量子生態学・技術開発事業を弊社単独で自由に推し進める機会をもたらしてくれました。

● 天然微粉体セリサイト ●

４・　ブラウン運動観察による自然界代謝正常化ノウハウ

弊社代表らが所有する特許技術第6864279号は、人体血液内ナノ粒子のブラウン運動が持つ挙動の正常性を、評価する技術です。

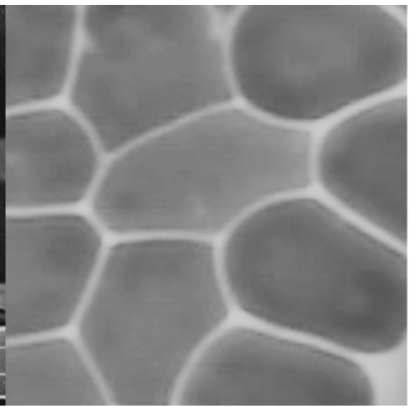
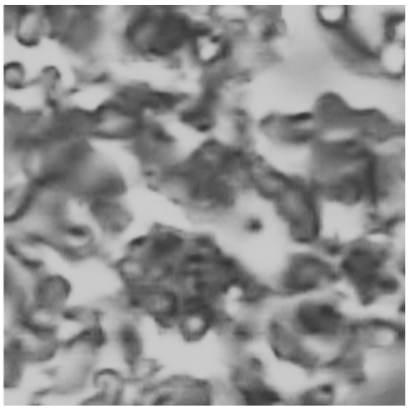
ブラウン運動は、1827年にイギリスのブラウンが発見した、自然界のあらゆるナノレベル粒子が持つ自然運動です。生物を筆頭に、様々な物質中の同レベルの粒子たちが全て同じ運動を持つと確認され無機粉体も同じであることから、ブラウン運動と生命現象は無関係と定義されました。この約100年ほど後には、アインシュタインやペランにより、ブラウン運動は原子や分子の衝突と確定されました。

以後科学界では、ブラウン運動と分子の衝突確率の研究が進み、生命現象との関わり研究は一切無く今に至ります。ところが科学の表舞台とは別のところで、世界の多くの研究者がブラウン運動と生命の関係を研究していました。自然界を素直に正直に観察する研究者たちは、真のメカニズムの下に、どうしてもこの関係性に辿り着いてしまっていたのです。しかしいずれの研究も、定義に反するあり得ない成果として、圧力を受けたり学会発表は許されないなどの対応を受け、潰され続け排除され続けてきました。

ブラウン運動に見るのは、小さな粒子が生き物のように動く世界です。謎の生命体や微生物として認識され、過去、フランスのアントワーヌ・ペシャンはマイクロザイマスとして、カナダのガストン・ネサンはソマチッドと名付け、ドイツではギュンター・エンダーレインがプロティットとエンドビオントと呼び、それぞれ独自名称で研究、日本でも牛山篤夫が、SICと呼ぶがん製剤へ応用しました。いずれの研究者も、自然界はこれら小さな生き物が関与して成立する、そんな共通見解を得ていました。

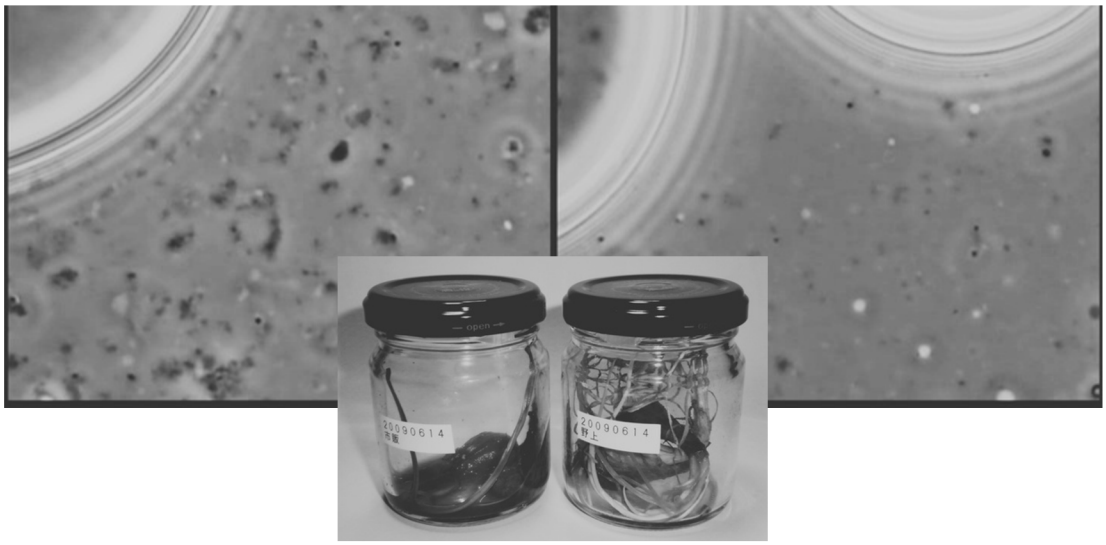
今現在もブラウン運動による生き物のように動く分子たちを、微生物や謎の生命体と捉える人々がいますが、いずれも全て、原子組成が違うコロイド粒子類です。ただし粒子組成と溶液の量子環境次第で、この粒子たちは鉱物にも生命にも変化します。そしてこのような粒子変化を起こすブラウン運動と量子作用の関係性を世界は誰ひとりも研究せず今に至り、これが地球環境問題を解消できない社会を作っています。

ところが偶然にも弊社は、世界でただひとり、ブラウン運動と量子作用の研究を行ってしまいました。この研究が量子生態学を産み、自然界を統一視点で把握させ科学の素人が、様々な異次元テーマの技術確立を提案させています。

5・　自然界ナノ粒子挙動判別技術

下の写真は、エシャロット（らっきょう）のブラウン運動静止画像です。左は慣行農法、右は弊社の量子作用農法です。左は農薬使用により、作物の量子環境が異常化したブラウン運動が窺えます。右の弊社生産エシャロットは、農地の量子環境を正常化したブラウン運動です。この顕微鏡映像撮影時にこの検体2種類のエシャロットを瓶に詰め、蓋をして放置しました。８ヶ月後、慣行農法は腐敗しましたが（左の瓶)、弊社農法では発根し（右の瓶)、生命力を発揮しました。



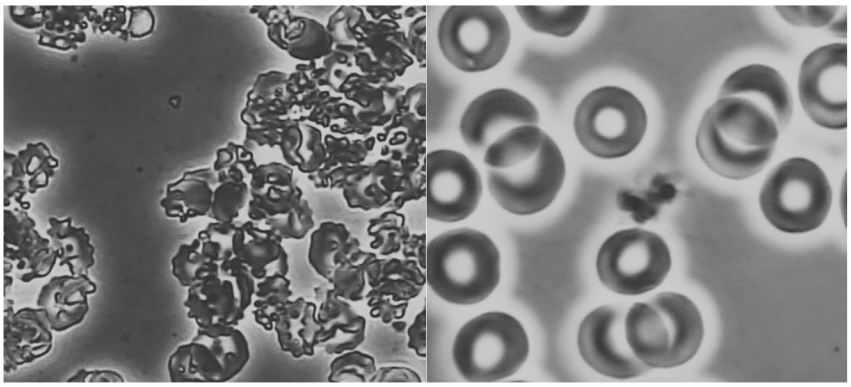
前ページで紹介した、量子生態学による特許（特許第6864279号）は、野上らの理論から誕生した血液評価に関する技術です。人体血液内ナノ粒子（主にヘモグロビン）の形態変化を顕微鏡で確認することで、血液母体が自然摂理に準拠するか否かを評価します。これはヘモグロビンのブラウン運動が、自然摂理の代謝機構に沿っているか否かを確認する技術でもあります。

下の画像はこの技術による血液の静止画像で、左はがん患者の血液、右は正常血液です。左のギザギザ赤血球は異常ヘモグロビンや異常血漿質が原因で、赤血球内ナノ粒子が正常に磁性反応できず異常集合を作り、赤血球形態を異常化しています。

つまりがんは、ナノ粒子も血漿質も含めた、体内環境の量子異常が原因です。上エシャロットの左側慣行農法の分子は粒子が集合しており、同じ現象が下のがん患者の赤血球内部で発生しているのです。

右の正常赤血球のヘモグロビンは粒子集合のような異常挙動が無く、弊社の右のエシャロットと同じように、粒子が分散しています。

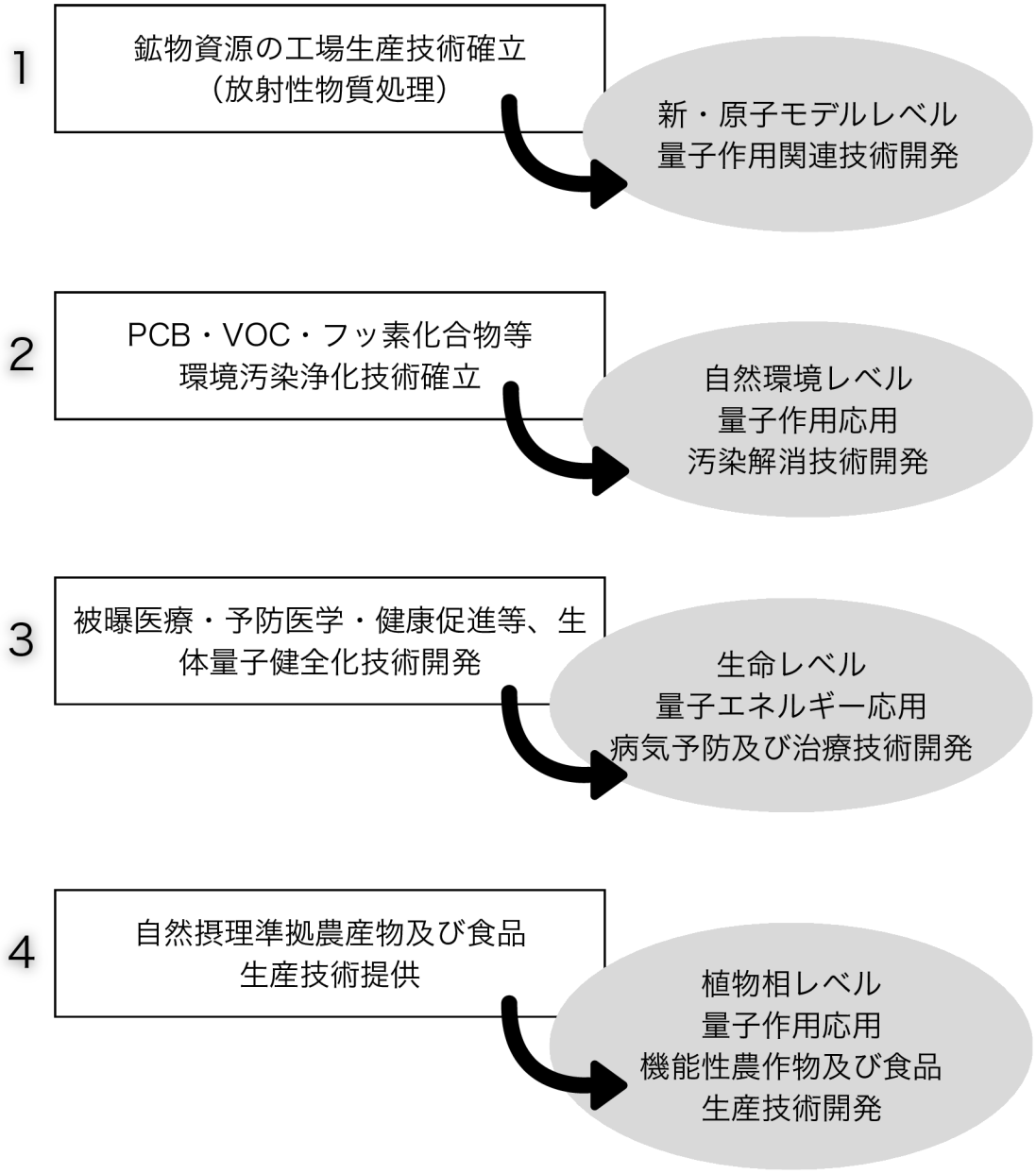
このようにブラウン運動は、自然界で同じ作用機構を持って反応しています。



量子生態学、新たな技術開発事業テーマ

2026年3月に公開した量子生態学技術開発事業説明書では、早期実施可能な4つのテーマを提示しました。この後に「はじめに」で記したように、量子生態学の理論を基礎にして協業者の技術や専門性を活かすことで、新しいテーマの技術開発の可能性が見えてきました。他の様々な日本企業の技術と量子生態学が融合したら、世界に類を見ない新しい視点の産業技術確立を、次々に実現できるでしょう。

下記左側の四角枠内は、初巻説明書に掲げた研究開発テーマですが、様々な分野の技術に量子生態学理論を反映させると、右側楕円にあるような、新次元の量子技術テーマの取り組みが可能になると想定できます。
次ページ以降、新たに想定された、開発可能な新技術テーマを解説します。

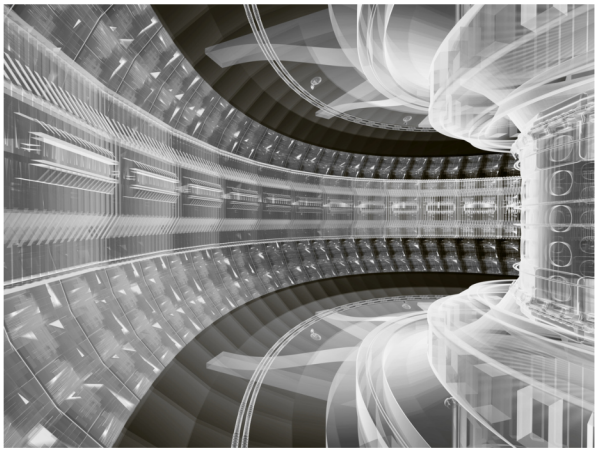


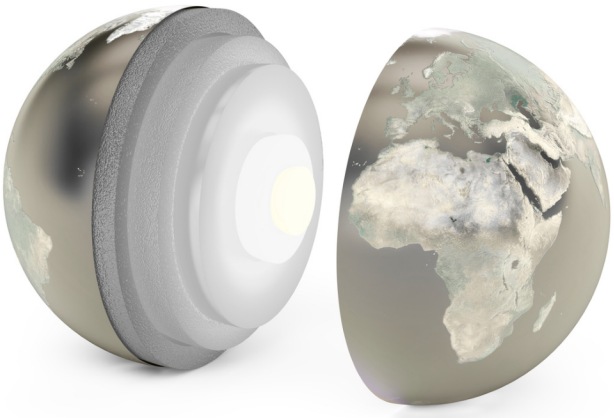
1 新・原子モデルレベル 量子作用応用技術開発

地球には、大陸地殻下30～60km内外、海洋地殻下５～10km内外より下部に、マグマのような流動性を持つ上部マントル層が存在します。このエリアを構成する主要元素は、およそ50％をマグネシウムとケイ素で占め、これらが地殻エリアで鉱物代謝を起こしていることが想定されます。特定無機元素の専門企業と協業することで、想定するより多様な種類のレアアースやレアメタルなどを工場生産する技術開発が、早期実現できる可能性が生まれます。また今般ご縁を頂いた原子力工学専門企業は新エネルギー装置を開発済みですが、詳細なメカニズムを解明できていません。ここに弊社の量子概念を提供することで、一気に技術進化が進むことが想定できます。

弊社ノウハウを踏まえ、協業体制整備中の企業の皆様との連携により、下記のような技術開発の可能性が見えています。

- 新・原子モデルによる宇宙秩序＝自然摂理機構把握
- 放射性廃棄物応用による多種類鉱物資源の工場生産技術開発
- 核物質安全化技術開発
- 超小形新エネルギー生成装置実現化
  （熱 ・ 電子 ・中性子・γ線等の自在コントロール）
- 非発熱型データセンターシステム開発
- 自然準拠型、量子コンピュータシステム開発
- 新・原子モデルによる各産業技術の効率化、基礎技術開発
- 温暖化解消アドバイス
- 石油の工場生産技術開発





2 自然環境レベル
量子作用応用汚染解消技術開発

産業革命以降、世界中で革新的技術開発や画期的製品開発などの視点で人類社会は人為合成分子を次々に開発しました。便利な生活は実現しましたが、結果的に自然界に多大な汚染を招き、解消できない実態があります。この汚染解消を、量子生態学理論に基づいた技術確立により、実現します。

量子生態学による汚染解消技術開発は、特定製品の開発ではありません。作用理論は原子が持つ陽子・電子・中性子の動作という、３要素の相互反応性であり、地産地消型の解消技術確立を図りたいと考えています。

地産地消は日本に古くからある概念で、食や農業分野で注目されていますが量子生態学では、多くの産業構造に、この概念を適合させるべきと判断しています。

産業は、古来、その土地が持つ資源や特性を活かすことで技術が誕生し、やがて流通システムが生まれ、技術や製品が外部へ拡大して発展することで整いました。各地の資源や特性は、例えば同じ鉱物質でも微妙な原子構成の差に見られ、微生物では微妙なタンパク質組成の差に反映されます。しかし大きな視野では、自然環境への影響に膨大な差が出るわけではなく、例えば花崗岩はどのような微少な差でも花崗岩であり特徴は同様で、乳酸菌なら乳酸菌で根本的な作用機構は類似します。汚染解消も、基本作用は同じでも、その土地の自然生態に即した環境でその土地の地域が持つ代謝能力で汚染解消を進める、そんな技術確立が本来なら望まれるべきでしょう。そうなれば、量子生態学に基づく作用の反応性を持つ資材が現地にあれば応用し、該当地の自然環境に沿いながら汚染解消を進めることができます。その土地の植生、その土地の土壌環境、その土地の代謝機構、あらゆる側面で攪乱が無く、異素材を持ち込むことを最低限に押さえ、該当地の環境と個性を活かしながら汚染解消を進める、本事業では、そんな可能性を模索します。

また全国にある大量の放射能汚染土壌は、トン袋などに梱包して積み置きされ、既存の原子力技術では解消不能な状況下にあります。しかし量子生態学の鉱物代謝概念では処理技術開発は可能で、しかも環境に大きな負荷なく解消できます。試験手順は既にできていますので、資金や実験環境が整えば、即座に検証して技術確立へ進むことが可能です。

本テーマでは、量子生態学、新・原子モデルによる量子作用を屈指し、種々の汚染解消を実現する技術確立を目指します。

PCB、VOC、フッ素化合物、放射性汚染土壌

現代社会の汚染処理及び解消を

新・原子モデルの量子反応理論により

地産地消の概念のもとに技術確立する

3 生命レベル　量子エネルギー応用
病気予防及び治療技術開発

量子生態学は、あらゆる現象を電子移動というたったひとつのメカニズムで説明する学問です。この視点による疾病の原因は、異常な電子移動による、異常細胞の形成と代謝異常で終始します。従って医学視点では、病気予防と治療は、次の2つの概念で実現可能です。

- 病気予防＝生命代謝に関する電子移動に異常を発生させない健康増進技術開発
- 病気治療＝発生している電子移動の異常を修正する技術、及び固定した異常細胞を正常に作り替える量子作用技術

量子生態学の視点では、形成されてしまった異常細胞は、生命の代謝機構を正常化させて軌道修正することで、少しずつ細胞も正常化されると想定できます。従って、正常な代謝を促進する電子移動技術を開発すれば解決可能です。そしてここには、原子の記憶性（量子もつれなど）が関与します。

原子の記憶性を踏まえた代謝機構として、量子生態学は遺伝子前駆分子の存在を提示しており、遺伝子前駆分子論としてネット上に理論書を公開しています。量子生態学では、人体におけるＤＮＡは個体の遺伝情報で、哺乳類胎生動物という種の遺伝情報はｍＲＮＡが担っていることが窺えており、これが遺伝子前駆分子に該当します。例えば、赤ちゃんが奇形児として誕生した場合、これは明らかに哺乳類胎生動物の遺伝情報に異常を来している状況です。しかし量子生態学の視点では、種の遺伝情報が修正できれば、正常形態や機能性を取り戻せる可能性が生まれます。今の医学概念では考えられない治療ですが、量子生態学と新・原子モデルの応用で、技術確立は可能で、連携できる医学者がいれば共にチャレンジしたい所存です。

次に、量子生態学提唱時より提示しているのが、量子生態学によれば被曝は瞬間解消が可能なことです。原子力発電所が稼働しており、福島第一原子力発電所の災害事故処理を進める現代社会では、何よりも先に、この技術確立を図るべきでしょう。

- 電子移動正常化及び健康増進技術開発
- 人体被曝の瞬間解消技術
- 身体異常等人体の、形態異常及び機能異常の正常化技術開発
- 全病気の電子移動解明による原因究明と病気の完全撲滅

4 植物相レベル 量子作用応用
機能性農作物及び食品関連技術開発

現代の農業化学でも自然科学でも認識していませんが、地球自然界ではピロール分子が、あらゆる有機物相で生命の循環機構を担っています。一方で同分子により、多様な有機化合物を形成可能で、人為合成した場合、自然界にない弊害分子であっても循環機構に取りこまれ循環してしまいます。弊社技術は、生命を支えるピロール分子が正常に循環するシステムを、再生蘇生します。

弊社と類似技術が農業界にあり日本各地で応用され、これらはラン藻農法やピロール農法と呼ばれています。ラン藻は毒性を持つものも含め多種類ありますが、一部は大気汚染を低減しダイオキシンも処理することがわかっています。ラン藻発生は水域系と認識されていますが、弊社技術によれば水田はもちろん畑でも汚染地でも発生させることが可能です。水が対流しなくてもラン藻繁茂環境を整え汚染を解消するのが弊社技術の特徴になっています。そしてここに反映させるべき重要視点が、地産地消の概念です。

先に汚染解消技術でも提示しましたが、地産地消は農作物ばかりで無く、肥料などの農業資材も同じで、地域単位の資源循環の実現は地球の持続可能性に重要です。
本事業では、排水の肥料活用を筆頭に、特定地域内における資源循環型の農業技術確立を図り、本事業では弊社農場を含めたモデル地区を整備し、実証試験を進めたい所存です。畜産堆肥や下水道汚泥の活用も踏まえ、農地の地下水汚染解消も図りながら、永続する資源循環農業の体制確立を目指します。

また量子作用による新エネルギー技術で熱コントロールを図るなど、植物工場などへ応用できる、新エネルギーによる熱コントロールシステム開発なども、協業体制制で可能になります。廃棄野菜や余剰作物の活用、食品加工の視点も含め、自然摂理に沿う食環境を実現する技術確立を目指します。

- 体内代謝機構を正常化する農作物生産技術の確立
- 永遠に腐敗しない醗酵食品の技術開発
- 様々な機能性を自然摂理に沿い発揮できる、加工食品開発
- 資源循環型、農業生産体制モデル構築
- ハウス栽培応用のための新エネルギーシステム開発
- 地域資材を用いるラン藻農法技術確立

量子生態学のミッション

　量子生態学の鉱物代謝理論によると放射性排水は鉱物資源の原材料として有効利用可能です。故に弊社は、日本政府はもとより大学等へ、10年以上に渡り40者近くに研究をお願いしてきました。残念ながらほぼ全てで、否定、拒絶、無視で終始し、研究は全く実現していません。現在の状況を見れば、福島第一原子力発電所の災害事故処理が近代科学では対応できないことは明らかなのに、新たな技術や理論を理解しようとする姿勢は、日本社会には皆無なのです。

　しかし自然摂理は限界を来しており、臨界点を迎えつつあります。
　それは、温暖化に見る異常気象、過去に見たこともない地殻変動の発生、体験したことがない道路陥没やインフラ崩壊などから窺えます。現在の経済や産業技術が自然摂理に沿わない様相が、否応なく、明らかにされています。ところが量子生態学の視点では、これ以上の大問題が見えています。人類社会システム自体が、宇宙の持つメカニズムに反しており、「自滅」の道を歩んでいることが明らかなのです。

　前ページで紹介したブラウン運動と環境中の粒子挙動の研究は、1900年代にアントワーヌ・ペシャンが既に実施していましたが、パスツールにより葬られました。
　1950年代に入るとガストン・ネサンが実施、しかしフランス医学界から圧力を受け、やはり影を潜めました。同じ1900年代前半にはエンダー・ギュンターレインも研究を進めていましたが、誰も認めることはありませんでした。
　日本では牛山篤夫が同じように、血中粒子の研究からSICを開発、末期がん治癒実績が幾つもあるに関わらず、1960年～1980年頃の国会（科学技術振興会議）で取り上げられつつも、がん学会と厚生省に潰されました。同会議では、有名な千島学説も否定され、牛山の技術共々、社会から完全消滅を余技無くされました。千島学説は、大学教授らが現象再現を自ら確認しながら現行理論に沿わないと論文を認めず、学会も無視を続け、非道な扱いを受けていたことは周知の事実です。

　そんな中で偶然弊社も、ブラウン運動の研究を実施してしまいました。幸にも、この技術に特許査定が降りました。2023年、取得した血液のブラウン運動特許技術を病気にならない社会作りに役立てたいと考え、グレーゾーン解消制度で医師法への抵触を確認しようと試みました。しかし申請前に厚生労働省と事前協議が必要とされ、多忙で協議日程が決められないとの対応を通し、同省から潰されました。
　牛山問題以来、50年以上経ても同じ姿勢の医療政策が、病気を治せない医療を実現し、膨大な税金を医療費につぎ込ませる経済システムを維持させています。

　ブラウン運動は、自然界において絶対的な代謝システムで作用しています。地球上のあらゆる場で同じ現象を起こし続けており、従って素直に自然界を研究したら、海外でも日本でも、いつでもどこでも、似たような成果が得られてしまいます。こうして登場した世界中のブラウン運動に関する研究成果が、既存科学概念の下に異端で定義に沿わないとして、公の研究世界から圧力で追放し続けてきたのが、科学研究歴史の現実です。過去の人々の行動が異常環境を作り続け、社会は今、ついに破滅崩壊の臨界点を迎えようとしています。それを明示するのが、ブラウン運動です。そして弊社のブラウン運動研究から人体ヘモグロビンには、自然界の絶対的なメカニズムが秘められていたことがわかりました。

　前ページで、血液ブラウン運動をについて紹介しましたが、ストレスや恐怖を受けた途端、赤血球は瞬時に、がん患者と同様の形態を作ることが判明したのです。

つまり自然界には、恐怖を受ける社会では人体赤血球が形状異常を作り病気になる仕組みが、暗に備えられているのです。これが意味するのは、恐怖や不安が蔓延する社会では事実上、生存危機に陥る作用が常時作動していることになります。これを言い換えると、「自然界は人間に対し、お互いに幸せにする行動しか許容していない」という自然摂理が存在すると表現できるでしょう。

ところが現実社会は、Ｇ８の実現で平和になったと思ったのも束の間、今さらながら戦争が多発しました。兵士たちは望まない殺人で精神に異常を来たし、戦下の人々は恐怖心しか持てず死と隣り合わせで生きています。経済格差による貧困で喘ぐ人々や、独裁政権による圧力でねじれた思想を受け入れざるを得ない人々も多数います。世界中で限界が迫りつつあり、恐怖から抜け出そうと、誰がいつ行動を起こしてもおかしくなく、もし臨界点を超えて暴発した場合には、政治も法律も制御は不能でしょう。異常災害の発生も人々の混乱も、自然摂理を無視している故に発生しています。とすれば、システムを正常に反映すれば、臨界点超えは回避できるかもしれません。

量子生態学応用による新しい概念の産業技術開発が実現し、理論の正当性が明確になれば、自然界には自然摂理という法律があり、宇宙や地球に厳然と作用していることを誰もが理解できるようになるでしょう。そうなれば、今の社会システムのままでは世界は破滅へ進むことも、誰もが容易に想像できるようにもなるでしょう。
一日も早く、「自然界は人間に対し、お互いに幸せにする行動しか許容していない」そんな法律が宇宙自然界に作用していることを世界中が認識する必要を弊社は感じ、量子生態学による技術開発を急ぐ理由がここにあります。

そしてもうひとつ、とても重要なことは、この自然摂理の存在を、人類社会の誰一人として今まで知らなかったという事実です。従ってこの周知が無ければ、今の自分の行動が宇宙自然摂理という法律を犯していることに気付けません。でも気付いたら、自分の行動を変える必要性にも、気付けるでしょう。そして気づいた人が即座に行動転換したら、今までの行為を誰も攻めることはできません。何故なら、そんな自然界法律が存在していたことを、誰も知らなかったのです。従って誰かが誰かを攻めることは絶対にできないし、してはならないのです。
例え今戦争をしていても気付いた途端に停止すれば、その瞬間から自然摂理に準拠することになります。そしてその行動転換を、誰も攻めることはできないのです。
こうして世界が転換すれば、臨界点は回避できるでしょう。

必要なのは、「自然界は人間に対し、お互いに幸せにする行動しか許容していない」そんな宇宙自然界の法律が存在することを、世界中が知ることです。それは、量子生態学という学問が正しい真理で成立しているとわかれば、理解できます。

量子生態学・技術開発事業はこの実現を目指し、弊社がある栃木県栃木市から始めようと決めて、この説明書を作りました。けれども弊社単独で、この自然摂理を世界へ広めることはできません。事業を支援協力いただき、また事業として成果を広める行動を起こして下さる皆様がいなければ、この事業自体が動きません。ただ、今、協業者が出て、ほんのわずかですが動きました。
これより以後も弊社は、本事業の実現を目指し、自然摂理に沿う産業技術開発へと邁進します。一日も早く成果を出して世の中に反映し、世界中に自然摂理という法律の存在を知ってもらえるよう、社会に臨界点越えが無きよう、貢献したい所存です。

量子生態学のミッション実現のために、事業をご支援頂きますよう、心よりお願い申し上げます。

Tochigiから始まる、日本が世界の中心になる

Quantum Ecology Technology Development Project

量子生態学 技術開発事業
説明書　VOL.2
オリジナル技術と開発テーマ

お問合せ